

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：52201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K04898

研究課題名（和文）近世大名の領内における空間計画に関する都市史的研究

研究課題名（英文）An Urban Historical Study on Spatial Planning in the Domain of Early Modern Daimyo

研究代表者

安高 尚毅（ATAKA, NAOKI）

小山工業高等専門学校・建築学科・教授

研究者番号：50341392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：福岡藩では、江戸期に町が形成された場所や町並みの変遷が文献調査と都市復原図から明らかにされた。特に御茶屋を中心とした都市計画が初期から計画されており、町並みの形成に深く関与していたことが示された。一方、萩藩では勘場を重視し、町並みの形成後に御茶屋などが設置された例が見られた。松江藩では中世からの町並みを基盤にして近世に町が建設され、御茶屋の配置に特に計画性が見られなかった。宇都宮藩では幕府の宿駅制度に基づき町並みが整備された。これらの研究から、藩主の政策や時代背景が各藩の町並みの形成に影響を与えたことが明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代都市の母胎となっているのは近世に開発された城下町とその衛星都市である在方町である。城下町はその多くが県庁所在地となり大きな変化が行われるが、在方町に関しては歴史的町並みがある程度残存し、歴史を活かしたまちづくりが期待されている。伝統的町並みに関する調査報告事例が少ない在方町＝地方都市においては、都市の歴史の固有性を明らかにすることが急務となっている。特に伝統的町並みは時代の流れと共に解体され、その存在自体が忘れ去られようとしている。地域の文化を継承し、今後の地域振興につなげていくためにも、都市復原図の作成と在方町の成立を明らかにすることは大きな意義をもっている。

研究成果の概要（英文）：In the Fukuoka domain, the locations where towns were formed during the Edo period and the changes in the townscape were clarified through document research and city reconstruction drawings. In particular, it was shown that urban planning centered on teahouses was planned from the early stages, and that the locals were deeply involved in the formation of the townscape. On the other hand, in the Hagi domain, emphasis was placed on kanba, and there are examples of teahouses and other facilities being established after the townscape was formed. In the Matsue domain, towns were built in the early modern period based on the townscape from the Middle Ages, and there was no particular planning in the placement of teahouses. In the Utsunomiya domain, the townscape was developed based on the shogunate's post station system. These studies made it clear that the policies of the feudal lords and the historical background influenced the formation of the townscape in each domain.

研究分野：日本都市史

キーワード：在方町

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本の近世都市は城下町と在方町の二類型によって捉えられる。近世都市の主角と見なされるのは町奉行支配下の城下町であり、これまで多くの研究蓄積がある。一方、在方町は農村として郡奉行支配下にあったため、量的には城下町を圧倒しつつも副次的存在と見なされてきた。近年は在方町の研究も城下町に比べれば少ないものの、研究の蓄積がされつつある。

これまでの在方町の研究は、在町と在郷町という2つの視点に引き裂かれ、藩ごとの特徴を重視する視点や、近世初期の都市類型として捉える視点、あるいは交通史の視点から宿場町として捉えるなど、静的な視点で捉えられている。藩領の全体計画を指し示し、ネットワークを形成する存在としての動的な視点が見られず、在方町の存在形態を総合的に捉えようとする研究は存在しない。近年は在方市町の研究に動的な研究の進展が見られるが、主に中世商人との関係に焦点が当てられている。一方、在方町の町並み調査は数多く行われているが、個別研究に終始し、在方町の都市史的位置付けについては旧来の視点を踏襲している。この在方町の中心に位置するのが御茶屋で、これまで建築史の分野で研究蓄積があるが、単なる宿泊施設や遊興施設として捉え、在方町の中での意味や、藩領での配置計画手法について捉えようとする視点はない。さらに、近世都市の成立に関しては戦国時代の戦闘時の本陣の構造という視点から新たな議論も提起されており、その視点に立脚した研究蓄積も望まれている。

### 2. 研究の目的

近世の城下町は計画的に設計・建設されたことがよく知られているものの、領内の在方町(従来の在町と在郷町を含む概念)がどのような意図で配置・設計されたのかについては、未だ明らかにされていない。これまでの研究では、参勤交代に関連する街道整備や農村集落の統括として、個別分散的な研究は行われていたが、領国全体の空間整備計画がどのような意図で行われたかについては、仮説の域を出ない状況である。

本研究の目的は、在方町の都市復原図を作成し、それを通じて領国全体の空間整備の計画性の有無を明らかにすることである。具体的には、近世前期の在方町を対象にし、特に福岡藩や萩藩のように代々の藩主が続く藩と、藩主交代があった松江藩や宇都宮藩を比較することで、領内の空間整備計画の存在について仮説の立証を行う。

さらに、伝統的な町並みの文化的価値を包括的に示すと同時に、今後の街づくりに役立つ資料としてまとめることも本研究の目的である。

### 3. 研究の方法

福岡藩の在方町は27ヶ所、萩藩の在方町は支藩を含めて68ヶ所、松江藩の在方町は29ヶ所、宇都宮藩の在方町は6ヶ所と、各藩の在方町は多岐にわたる重要なテーマである。本研究では、それぞれの藩において以下の方法を用いて調査研究を行う。

福岡藩：福岡藩の在方町については、在方町の復原図と文献資料を基に、その成立起源と藩営施設の設置について詳細に解析する。

萩藩：萩藩の在方町については、特に勘場と御茶屋が配置された8ヶ所の集落に絞って検討を行う。復原図と文献資料を通じて、各集落の形成過程と藩営施設の配置について深掘りさげる。

松江藩：松江藩の在方町については、29ヶ所すべてについて在方町の復原図と文献資料を基にして、その成立起源と藩営施設の設置について詳細に検討を行う。

宇都宮藩 宇都宮藩の在方町の一部は日光街道に関連して建設されており、その特性を踏まえつつ、計画性を比較検討の対象とする。

これらの研究結果を通じて、各藩の在方町の成立過程を明らかにし、特に参勤交代に伴う街道

整備や藩営施設の配置についての一貫性を探求する。具体的な研究方法は以下の3つに分けられる。

1.文献調査：各藩（福岡藩、萩藩、松江藩、宇都宮藩）に関する既存の研究文献を収集し、在方町の成立過程に焦点を当てた文献の状況を確認・整理する。また、街道整備や藩営施設の設置に関する史料調査も行う。

2.都市復原図および藩営施設の平面図の作成：地籍図や絵図などから近世初期から存在する都市の復原図を作成する。また、各藩の藩営施設に関する史料から平面図を作成する。

3.情報分析：藩営施設の建築形式や配置、都市の形態分析を行い、藩主家の変遷と歴史的な展開における計画性の違いについて整理する。ミクロレベルでは地割の計画の違いから都市の特性を把握し、例えば中世起源の都市と近世に新たに建設された都市との違いを考察する。マクロレベルでは御茶屋、勘場、本陣、代官役宅などの領内分布と都市の配置における計画性を総合的に分析し、読み取る。

これにより、諸藩の在方町の空間計画を明らかにし、今後の街づくりに貢献する資料を提供することを旨とする。

#### 4.研究成果

##### ・福岡藩の成果

文献調査から江戸期に町建てされたことが確実な在方町は畔町・今宿・前原・内野・干手・野町・篠栗・青柳の8ヶ所であることが把握された。町の形成過程から、江戸期の町建てと考えられる在方町は、山家・原田・赤間・久喜宮・志波・大隈・篠栗の7ヶ所であることが把握された。都市復原図から、中世の町に江戸期の町並みが付け加えられたと考えられる在方町は黒崎・木屋瀬・芦屋・箱崎・甘木であることが把握された。また、小石原・金武・飯場が江戸期の町並みと推測した。さらに、中世からの町並みと考えられる在方町として、若松・姪浜であることが把握された。根拠が不十分なものの中世の町に江戸期の町並みを付け加えられたと考えられる在方町は飯塚・宰府・二日市であることが把握された。

藩営施設の配置については、御茶屋は町並みと共に計画されていたことが明らかにされているが、本研究の結果、町茶屋建築は初期の在方町計画には含まれていなかったことが判明した。ゆえに、在方町は御茶屋を中心とした都市計画が行われた可能性がますます強くなった。ミクロレベルでは内野と箱崎の町茶屋建築の成立について、在方町との関係性を念頭に置きつつ平面図を中心に考察を行い、増築による建設過程の仮説を提示した。また、問屋場の位置を把握した。在方町27のうち、問屋場の場所が把握されたのが、篠栗、大隈、山家、飯塚、内野、木屋瀬、青柳、赤間の8宿のみで、これらはすべて町並み中央に設けられていた。

##### ・萩藩の成果

萩藩の在方町の研究は勘場と御茶屋を合わせ持つものに絞って研究を行った。その在方町は本郷、上関、花岡、三田尻、山口、小郡、舟木、吉田の8つの在方町である。

文献調査により、江戸期に町建てされた在方町は本郷、吉田で、山口と小郡は中世からの連続性が推測される。残りの在方町は不明であった。ただし、全体的に中世の町並みを市商業によって活性化し、引き継いだ可能性があることが把握された。

また、都市復原図および藩営施設の配置から御茶屋・勘場の配置は計画的に行われていることが把握された。ただし、それらの設置は町並み成立の後からである例が散見され、町並みの成立の方が先である可能性を知ることができた。また、御茶屋の設置数よりも、勘場の設置数が多いことから勘場に重きを置き在方町の改変をしたのではないかという仮説を導き出した。

##### ・松江藩の成果

文献調査により、中世からの連続性があると考えられる在方町が安来、本庄、山口、杵築、一窪田、久村、荒島、木次、横田、亀嵩であることが把握された。また、近世に町建てされた在方町が湯町、掛合、吉田であることが把握された。

さらに、都市復原図と藩営施設の配置を分析した結果、中世の町場に近世の町場が加えられている例が多く見られることが把握された。また、現段階の研究においては在方町の整備が江戸初期に見られないという結論に達した。ただし、この結論は今後変わる可能性がある。

安来町に関しては、ミクロレベルでの考察を通じて、町並みの拡張過程が明らかにした。安来の町並みは江戸時代初期に中世の町並みを基盤に拡張され、「西御幸通」「東御幸通」「大市場」「中市場」「西小路」「東小路」「井戸小路」「西灘町」「新町」「中町」「港町」などの地区が形成され、山陰街道沿いには短冊地割が並んだ。南側には山が迫り、多くの寺社の配置を見る。特に中世からの町並みと考えられる「御幸通」は曲線道路として存在し特徴的である。また、藩営施設の配置に特に計画性は見られなかった。

藩営施設は御茶屋・郡中屋・制札場・目代所・町下役人・灘番所・庄屋所・郡屋・御代官屋・口番所・獄屋がある。特に御茶屋の配置は町の外れに存在した。愛宕山の山麓東の御茶屋の敷地は、かつて向陽寺で、松平直政が寛永15年(1638)に松江に入城してから江戸参勤交代の途中、安来に宿泊所の御茶屋をつくるため向陽寺を移転させたと伝わる。このことから、御茶屋の配置は町建てとは異なる経緯があったことが理解される。

寺社は古代・中世からのものが、乗相院(天平14年742)時宗向陽寺(弘安八年1285一遍上人開山)松源寺(応永7年1400)浄土宗西方寺(永禄元年1558)があり、近世のものは徳応寺(慶長年間1596~1615)薬師(明暦2年以前1656)洞正院(元禄11年以前1698)祇園社(元禄12年1699)八幡宮(享保3年1718)がある。これらから中世の町並みが想起されるとともに、特に徳応寺の配置からは慶長年間に街道整備が始まり、その後、他の寺社の成立から段階的に整備されてきたことを明らかとした。

以上のように、安来町の中世からの連続性、御茶屋と町並みの整備の関係性、そして藩営施設の配置についての考察を通じて、松江藩の在方町の特徴とその成立過程を把握しました。

#### ・宇都宮藩の成果

文献調査により、白沢宿は慶長14年に町割りがされ、雀宮宿は元和年間に町建されたことが把握された。一方、徳次郎宿については不明点が残った。また、都市復原図および藩営施設の配置から町並みの中心に本陣が設置され、宿駅制度の整備と期を一に整備されたことが把握された。

これらの結果から、初期の仮説が裏付けられた。在方町と御茶屋をセットとした領内支配を意図した計画性のある藩は福岡藩のみであり、萩藩は御茶屋ではなく勘場を重視した領内支配を目指していたことが明らかにした。一方、松江藩では藩主の入れ替わりにより、計画性を示す事例が見当たらず、宇都宮藩は幕府の宿駅制度に従って在方町の整備を行っていたことが分かった。福岡藩の場合にのみ、在方町の計画に藩の意図が強く反映されていることが特徴的である。萩藩では一定の計画性は見られるが、福岡藩ほど明確ではなく、松江藩や宇都宮藩では藩の意図を読み取ることが難しい結果となった。この分析から、福岡藩の特異性が浮かび上がった。

藩主交替という仮説は正しかったと思われる。しかし、萩藩毛利氏は元からの土地を整備したのに対し、福岡藩黒田氏は新たな土地を整備したのであるから方針が異なることは必然的で、それにより両者の整備が異なったのだろう。

よって、それぞれの藩で、藩主の動向が領内整備にどのように影響したかを詳細に検証する必要性が導き出された。松江藩や宇都宮藩では藩主交替や幕府の宿駅制度による影響が見られ、藩

主の動向が領内整備にどのように影響したかについても詳細に考察する必要性が導き出された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安高尚毅
2. 発表標題 松江藩在方町安来と安来御茶屋の空間構成
3. 学会等名 日本建築学会中国支部研究報告会
4. 発表年 2023年～2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松村秀一, 稲葉信子, 上西明, 内田青蔵, 桐浴邦夫, 藤田盟治, 安高尚毅	4. 発行年 2022年
2. 出版社 晶文社	5. 総ページ数 241
3. 書名 和室礼賛	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------